＜知的障害教育＞

キャリア発達を促す「自己肯定感」「自己有用感」を育む取り組みの工夫

―自尊感情測定尺度を用いた実態把握に基づく教科「職業」の貢献活動を通して―

沖縄県立美咲特別支援学校　與那城　哲

Ⅰ　テーマ設定の理由

近年、諸外国と比べ日本の子供の「自己肯定感」「自己有用感」が低いことが問題視されるなか、「我が国と諸外国の若者の意識に関する調査」（平成 30 年内閣府）によると「自分は役に立たないと強く感じる」の問いに「そう思う」「どちらかといえばそう思う」と答えた子供が 52.7％と半数を上回る。そのような中、文部科学省初等中等教育局は答申において現在急速に発達するメディア技術、子どもの体験活動の減少、社会構造の変化といった子供の成育環境の変化を見据えた社会全体による徳育の推進が必要であるとし、社会性・人間関係・言語能力と共に規範意識や自己達成感、自己有用感を育成することが重要であると示した。

子供たちが「生きる力」を身に付け、よりよい社会参加を行うためには、望ましいキャリア発達を遂げることが大切であり、そのキャリア発達を促すため、社会性の基礎となる「自己肯定感」と「自己有用感」の高まりが重要であると考える。中央教育審議会は「今後の学校教育におけるキャリア教育・職業教育の在り方について」の中で「学校教育は、学校から社会・職業への移行に係る課題を克服し、社会環境が複雑化・多様化する中にあっても、社会人・職業人として自立できる人材を育てるという社会的な要請にこたえていかなければならない。」とキャリア教育の必要性を明言した。

美咲特別支援学校（以下本校とする）は沖縄本島中部に位置し、高等部では本校中学部から進学してきた内部生に地域の中学校から入学してきた生徒が加わり、その在籍数は年々増加している。令和３年度には高等部在籍者数は 155 名となり県内最大規模となった。

本校では、休み時間になると笑い声が溢れ雰囲気は明るく、授業や運動会、販売学習、技能検定、就業体験等の行事や活動において主体的に懸命に取り組む姿が見られる。また、卒業後の一般就労に向けて意欲的な生徒がいる一方で、不登校や授業拒否、障害特性から授業に参加できない生徒や人間関係形成に課題があり教室へ入れない生徒もいる。多くの保護者は、生徒一人ひとりが将来、自身の夢を実現し友人や職場の同僚に囲まれ趣味を楽しみ、自立した幸せな人生を歩んで欲しいと考えており、豊かな社会生活を営んで欲しいという願いをもっていることが個別の教育支援計画から伺える。

本校では、「自立、社会参加・貢献をめざし、必要な資質、能力、態度を育てる。(自ら考え、学び、行動する子)」を学校教育目標に掲げ教師一丸となり指導を行っており、教科「職業」においては「将来の職業生活の実現や地域社会への貢献に向けて、主体的・実践的な態度を養う」を指導の重点として日々授業を行っている。しかし、生徒の中には、他者とのコミュニケーションが苦手であったり、気持ちや行動をコントロールすることや読み書き計算の困難さを抱える生徒が多い。そのため、友人間のトラブルや学習への自信のなさなどが伺え、卒業後の社会参加を見据える上でも、「自己肯定感」や「自己有用感」を育むことは重要であり、本校高等部の課題ともいえる。

以上のことから、卒業後の自立した社会参加へ繋げるためにも、東京都自尊感情測定尺度を使用した生徒の実態把握を行うとともに、キャリア発達を促す授業内容・指導の工夫や貢献活動を通して「自己肯定感」「自己有用感」を育むことが必要であると考えた。本研究においては、日頃使用している教室の床にワックスをかけることで、他者のために貢献する喜びを感じるとともに、教師や級友から感謝され認められ、「自己肯定感」や「自己有用感」が育まれるであろうと考えこのテーマを設定した。

〈研究仮説〉

東京都自尊感情測定尺度を用いた生徒の実態把握やキャリア発達を促す教科「職業」における授業内容や指導の工夫を行い、学んだ知識と技術を活かし異年齢による共同学習で貢献活動を行う事で生徒の「自己肯定感」「自己有用感」が育まれるであろう。

Ⅱ　研究内容

１　「自尊心」を支える「自己肯定感」「自己有用感」について

新谷は「自尊心の開放」(2017) において、自尊心とは「自分自身を全体的にとらえたときに、自分を好ましいと感じ、価値ある存在だと思う程度の事であり、自己に対する肯定的な評価や感情のことを言う」と定義づけている。

本校生徒が卒業後、よりよい社会参加を行うためにも、自己肯定感を「自己の身体的な特徴や能力や性格などについて肯定的に考えたり、感じたりする感情」(「教育用語辞典」中島 2005) とし、自己有用感を「自分の属する集団の中で自分がどれだけ大切な存在であるかということを自分自身で認識する事」(「自己有用感－生きる力の中核－」北島 1999) と捉え、教科「職業」における貢献活動の取り組みを行うこととした。

２　「我が国と諸外国の若者の意識に関する調査」について

内閣府は、我が国の若者（13 歳～23 歳）の意識の特徴及び問題等を把握し、子供・若者の育成支援に関する施策の参考とするために 1972 年より５年おきに「我が国と諸外国の若者の意識に関する調査」を行っている。この調査では「自己肯定感」や「自己有用感」に関する質問事項があり、その結果を分析した加藤によれば、「自尊感情が何に基づいているのかに注目したところ（中略）日本の若者においては有用感（自分は役に立たないと強く感じる）といった対他的な意識が比較的強く関連していることがうかがわれた。また、有用感は他国の若者の自尊感情にはほとんど関連していなかったが、有用感自体の平均値に関しては、特に日本の若者が際立って低いということはなかった」（図１）と述べている。しかし、「自分は役に立たないと強く感じる」の項目において平成 25 年度と平成 30 年度を比較すると、「そう思う」「どちらかといえばそう思う」と答えた若者の数が平成 30 年度では増加しており自己有用感が低下していることがわかる（図２）。

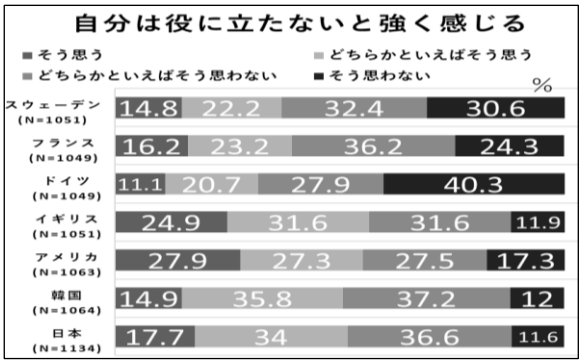


図１　「我が国と諸外国の若者の意識調査」

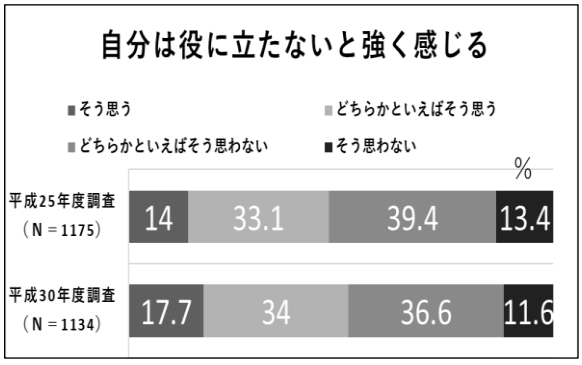


図２　平成 25 年度と平成 30 年度の比較（H30）

本校には地域の中学校から入学してきた生徒が多くおり、中には「自己肯定感」や「自己有用感」が低下している生徒もいる。

「自己肯定感」や「自己有用感」は生きる上で大切なものであり、幼少期から青年期まで多くの時間を過ごす学校においてよりよい体験や豊かな経験を積むことは重要であると考える。

３　自尊感情測定尺度（東京都版）について

本研究においては生徒の自尊感情を測定するために、質問項目もわかりやすく答えることが容易で前後の変化が比較しやすい「自尊感情測定尺度（東京都版)」を使用することが適切だと考えた。

自尊感情測定尺度は東京都教職員センターにおいて、「子どもの自尊感情を高めるための教育の

充実」を推進するため開発されたものである。幼児・児童・生徒の自尊感情の傾向を適切に把握するため、22 の質問事項が有り、「Ａ自己評価・自己受容」「Ｂ関係の中での自己」「Ｃ自己主張・自己決定」の３つが自尊感情を構成する大きな柱と捉えている（表１）。

表１　自尊感情の３つの観点（子供の自尊感情や自己肯定感を高めるためのＱ＆Ａ）

【Ａ自己評価・自己受容】
自分の良さを実感し、自分を肯定的に認められているかをみる項目である。教師との関係において影響が大きいことから、教師からの評価や言葉かけによる効果が期待されている。
【Ｂ関係の中での自己】
多様な人との関わりを通して、自分が周りの人に役立っていることや周りの人の存在の大きさに気付く項目である。学習に対する意欲や良好な友人間関係においての影響が大きいことから、学習や友人関係の構築についての支援による効果が期待されている。
【Ｃ自己主張・自己決定】
今の自分を受け止め、自分の可能性について気付く項目である。学校では進路意識との関連や影響が大きいことから、キャリア教育などによる効果が期待できる。

４　沖縄県のキャリア教育における身に付けさせたい力

中央教育委審議会は「今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について」（平成 23 年１月）の答申においてキャリア教育とは「一人一人の社会的・職業的自立に向け、必要な基盤となる能力や態度を育てることを通して、キャリア発達を促す教育」と定義した。

そして、これまでの「４領域８能力」を補強し「基礎的・汎用的能力」を示した。それを受け沖縄県は「目的意識をもって、様々な人と共同し、社会を支える自立した人材の育成」をキャリア教育の目標とし、身に付けさせたい力を下記の通り示した（表２）。

本研究においてはこの「沖縄県のキャリア教育において身に付けさせたい力」（か・ふ・や・み）を踏まえた授業づくりを行う事で、テーマである「自己肯定感」、「自己肯定感」の育成にせまりたい。

表２　沖縄県のキャリア教育における児童生徒に身に付けさせたい力

か	ふ	や	み
かかわる力	ふりかえる力	やりぬく力	みとおす力
人間関係形成・社会形成能力	自己理解・自己管理能力	課題対応能力	キャリアプランニング力
・多様な集団の中で他者とかかわる力 ・進んで考えや気持ちを伝えあう力 ・人や地域を大切に思う気持ちや感謝する心 ・協力する力 ・社会を積極的に形成する力 ・協力する力 ・社会に参画し、社会を積極的に形成する力　など	・行動を振り返り、改善につなげる力 ・自己の役割を理解する力 ・情報、助言を正しく理解し自分を見つめる力 ・自分の良いところを見つめる力　など	・問題を発見できる力 ・問いを立てる力 ・課題に対応した計画を立案する力 ・計画を実行する力 ・発想（想像）する力 ・間違いや他人との違いをおそれない力 ・最後までねばり強くやり通す力　など	・将来を想像する力 ・自分の目標を設定する力 ・目標設定のために計画を立てる力 ・立てた目標を確認し次につなげる力 ・自ら主体的に判断して、キャリアを形成していく力　など

（沖縄県キャリア教育の基本方針　沖縄県教育委員会　一部抜粋）

５　「交流及び共同学習」の意義・目的及び教科「職業」における異年齢交流について

文部科学省は、「交流及び共同学習ガイド」（平成 31 年）において、「共に活動する交流及び共同学習は、障害のある子供にとっても、障害のない子供にとっても、経験を深め、社会性を養い、豊かな人間性を育むとともに、お互いを尊重し合う大切さを学ぶ機会となるなど、大きな意義を有するものである」とし、障害の有無にかかわらず、誰もが相互に人格と個性を尊重し合える共生社会の実現において大切な学習の一つであるとしている。

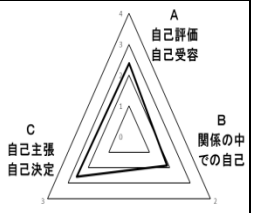
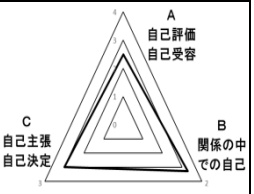
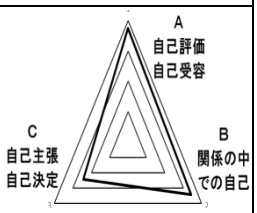
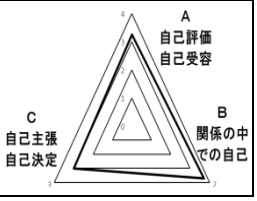
また、国立教育政策研究所は「『異年齢交流』が年長者の『社会性の基礎部分』を形作る際、カギを握っているのは交流相手の年少者であり、彼らの言動や視線が年長者の『自己有用感』の獲

得に大きな影響を及ぼす」としており、異学年間学習の重要性を唱えている。

本校高等部では、教科「職業」において週３時間、１年生から３年生まで一斉に行う「職業」（全体職業）を設定し、生徒の社会性(思いやりの心，コミュニケーション能力等)を養う事を意識して授業を行っている。本研究においては、この異年齢による共同学習を通じリーダーシップの育成や多様な人間関係を構築するとともに、体験的・実践的に学ぶなかで貢献する喜びを感じる事で「自己肯定感」や「自己有用感」を育みたいと考える。

Ⅲ　研究の実際

１　「個別の教育支援計画」･「自尊感情測定尺度」からみる生徒の実態と課題

	個別の教育支援計画における本人・保護者の願い	生徒の様子	自尊感情測定尺度による本人の課題	レーダーチャート
生徒Ａ	・自分の気持ちを自分で伝えられるようになる。 ・たくさん友達をつくり、楽しく学校へ通う。	基本的に落ち着いており、誠実で素直であるが、引っ込み思案でネガティブな思考に捕われることがある。	・自分の良さや個性を認識する場面経験を増やし、自分を受け入れられる。 ・人との関わりの中で自分がある事に気付く。 ・体験的な活動を通して集団のために活動する喜びを体験する。 ・他者との比較ではなく自分なりの目標の達成を目指す。 ・自分の判断や自分で決定することに自信を持つ。	
生徒Ｂ	・仲間と協力して物事　に取り組むことができる。 ・場に応じた適切な言葉づかいをすることができる	明るく真面目な性格であるが、相手の気持ちを読み取ったり、自分の気持ちを言葉で伝えることが苦手である。	・自分の良さや個性を認識する場面を経験し、自分を受け入れられる。 ・自分の意欲を尊重し、責任を果たす。 ・友達との関わりの中で自分の役割を果たしていることを実感する。 ・同じ事柄でも多様な考え方があり、受容できる。 ・よりよい対人関係を築く。	
生徒Ｃ	自分の気持ちを整理し適切な言葉で相手に気持ちを伝えることができる	明るい性格で協調性があるが、自分の気持ちや意見を言わず、周囲に流されることがある。飽きっぽく、指示待ちになることもある。	・自分の良さや個性を認識し、自分を受け入れることができる。 ・積極的に自己開示をし、自分の判断、行動に自信を持つ。 ・他者との比較ではなく、自分なりの目標の達成を目指す。 ・自分の得意とすることを見つけ打ち込む。 ・自分の長所や短所を知り、自己理解に努める。	
生徒Ｄ	・自分の意見を発表することができる。 ・自分の言いたい事を適切な言葉で伝えられるようになる	堂々としており周囲を引っ張る力があるが、短絡的で相手の気持ちを考えない言動を取ることもある。	・自分の良さや個性を認識し、自分を受け入れることができる。 ・自分の判断や自分で決定することに自信を持つ。 ・他者と協力し、自分とは何か自己を客観的に見つめることができる。 ・他者の良いところにも気付き、協力して学校生活を送ることができる。	

２　東京都自尊感情測定尺度による結果

教科「職業」(環境美化班）学習グループＡ１・Ａ２に属する２年生４名の生徒に行った結果、下記のとおりとなった。

【自己評価・自己受容】

「私は自分のことが好きである」に対し全員が「あてはまらない」「どちらかといえばあてはまらない」と回答したことから、自分の良さを実感し自分を肯定的に認めていなことが伺える。これは思春期特有の興味や関心が外側から内側に向くことで自己に対しての関心が高まり他者と比べることで自己評価が下がる傾向にあるものだと考えることもできる。

【自己主張・自己決定】

生徒Ｂ・Ｃ・Ｄは多様な人との関わりを通して、自分が周りの人に役立っていることや周りの人の存在の大きさに気付くことに肯定的であるが、生徒Ａは否定的な回答が目立った。

【自己主張・自己決定】

「私は自分の長所も短所もよくわかっている」の問いに生徒Ｂ・Ｃが「どちらかといえばあてはまらない」と回答。「私にはだれにも負けないもの（こと）がある」の問いに生徒Ｃが「あてはまらない」と回答し、生徒Ａが「どちらかというとあてはまらない」と回答した。

総合的な評価として各項目の合計点数の平均を見てみると、生徒Ｄが 3.32 点と自尊感情が一番高く、次いで生徒Ｃの 3.20 点、Ｂの 2.93 点と続き一番低かったのはＡの 2.27 点であった。生徒Ａに関しては、「私には自分の事を必要としてくれる人がいる」、「私は自分の個性を大事にしたい」の項目において肯定的に答える面もあるが、全体的に否定的な回答が多かった。

３　授業計画

回	題材	身に付けさせたい力
1	オリエンテーション ビルメンテナンス「ワックスがけを学ぶⅠ」	・他者と関わる力【か】　・気持ちを伝えある力【か】 ・自分の良いところを見つめる力【ふ】
2	ビルメンテナンス「ワックスがけを学ぶⅡ」	・他者と関わる力【か】　・気持ちを伝えあう力【か】 ・問題を発見できる力【や】　・最後までねばり強くやり通す力（や）
3	「アサーションスキルを学ぶ」	・他者と関わる力【か】　・気持ちを伝えあう力【か】
4	「共に学び貢献しよう」（事前学習）	・他者と関わる力【か】　・気持ちを伝えあう力【か】 ・自己の役割を理解する力（ふ）　・問題を発見できる力（や）
5	「共に学び貢献しよう」	・他者と関わる力【か】　・気持ちを伝えあう力【か】 ・自己の役割を理解する力【ふ】　・計画を実行する力【や】
6	これまでの学習の振り返り	・行動を振り返り、改善につなげる力【ふ】 ・自分の良いところを見つめる力【ふ】　・気持ちを伝えあう力（か）

４　授業における指導及び教材の工夫

(1) ペア学習

ペア学習には相手と意見を交換することで自分の考えに自信を持ち、相手への伝え方を学ぶ事で話す力や聞く力を向上させることができる点や気軽に意見を言い、相談することで問題解決へと近づくことができるといったメリットがある。本校生徒のコミュニケーションを見てみると、言葉の間違った使い方や気持ちの伝え方などによるトラブルも見られることから、共同作業において大切なコミュニケーション力を向上させ、相手の意見を尊重しつつ自分の意見を伝えることで自分に自信を持ち自己肯定感が高まると考え取り入れた。ペアの編成は同じ学習グループ同士で生徒Ａ・Ｄ、生徒Ｂ・Ｃとすることとした。

(2) 「アサーションスキル」を取り入れたコミュニケーション力向上の工夫

アサーションは 1950 年頃アメリカで誕生したものであり、精神医学における行動療法が始まりである。現在はよりよい人間関係の構築をするためのコミュニケーションスキルの一つとして使われており、「人は誰でも自分の意見や要求を表明する権利がある」との立場に基づく適切な自己主張のことをいう。自他共に尊重し率直に自己表現ができるようになることを目指すアサーションを学ぶ事で生徒たちによりよいコミュニケーションスキルの知識を獲得させたいと考え、本研究においてその技法を取り入れることにした。

(3) 教材の工夫

①　ＩＣＴ機器の活用

前回の授業の様子をタブレット端末で撮影し動画や写真で確認することにより、これまでの学習の様子を正確かつ詳細に振り返ることができる。また、パワーポイントにより各自が出した意見を皆の前で紹介することで、自分を肯定的に捉え自分の意見に自信を持つことができると考えＩＣＴ機器を使用することとした。

②　「授業で心がけること」・「手順表」の活用

「授業で心がけること」（図３）を提示し授業における目標を明確にするとともに、見通しを持って取り組むことがで

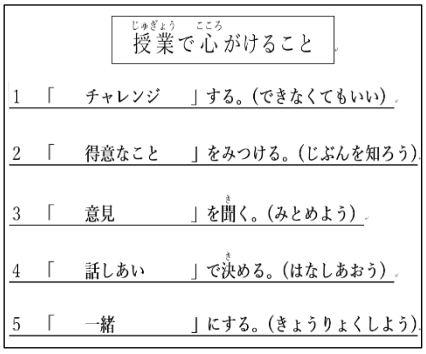


図３　「授業で心がけること」

図４　「手順表」

きるよう「手順表」（図４）を提示した。また、困った時や次の活動がわからなくなった時は手順表を確認するよう促した。

５　授業の実際

(1) 検証授業①【令和３年５月 13 日実施】

①　題材名　ビルメンテナンス「ワックスがけを学ぶⅡ」

②　本時の目標

ア　ペアとの共同作業を通じ、自分の意見を相手に伝えることができる。

イ　提示された手順表を活用して、ペアと協力してワックスがけを行う事ができる。

③　授業仮説

ア　授業における目標「授業で心がけること」の確認や「手順表」を提示することで、ペアと協力し見通しを持ちワックスがけを行う事ができるであろう。

イ　前回の様子（画像や動画）を確認し、皆で協力する事の大切さを意識することでペアと行う「共同作業」を積極的に行う事ができるであろう。

④　授業の概要

これまで行った授業において、何事においても「チャレンジ」することが大切であるという事や他者とのコミュニケーションを図りながら行う共同作業が大切であるという事について指導を行ってきた。本時においては、「教室のワックスがけ」の２回目であり、前回行った様子について画像を見ながら思い出し、ペアと「共同作業」を行う事の大切さを意識づけさせる。また、教師が必要以上の支援を行う事なく、提示された作業工程をペアと確認しながら作業を行う事で「共同」と「対話」が大切であることも考えさせるようにした。

⑤　検証と考察

生徒達は動画や画像を視聴する事により前回の授業を振り返り、自分が出した意見を確認し感想を伝えあうことができた。また、作業手順をいつでも確認できるように黒板に掲示したことで、次に行う作業をペアで確認し作業に取り組んでいた。生徒Ａは手順表を確認し見通しを持ち取り組む様子が見られ、意見を出すことに戸惑う場面もあったが、教師に促され皆に意見を述べることができた。また、ペアである生徒Ｄを気遣い、邪魔にならないよう機械のコードを持ち上げながら作業を行う事ができた（図５）。生徒Ｂや生徒Ｄは「共同作業」を意識したことで、機械操作の苦手な生徒Ｃを気遣いアドバイスをし、作業を手伝う姿が見られた。また、生徒Ｄは自分で考え主体的に作業に取り組む様子がみられ、ワックス塗装に関しては生徒Ｃと会話を通じ共に学び会う姿見られた（図６）。そのことからも、キャリア教育で身に付けさせたい力である「他者と関わる力」「気持ちを伝えあう力」「問題を発見できる力」「最後まで粘り強くやり通す力」を育むことができたと考える。

図５　「相手を気遣い作業する様子」

図６「会話を通じ共に学び合う姿」

以上の事から「授業で心がけること」や「手順表」を提示することや、「共同作業」を意識させる授業づくりは生徒が見通しを持ち作業に取り組むことができ、コミュニケーション力の向上を図ることができる大切な工夫であるということがわかった。

(2) 検証授業②【令和３年６月８日実施】

①　題材名「アサーションスキルを学ぶ」

②　本時の目標

ア　コミュニケーションスキルの一つである「アサーション」について知ることができる。
イ　共同作業を行うために必要なよりよいコミュニケーション方法を学ぶ事ができる。

③　授業仮説

ア　「アサーション」について知ることで、他者から見た自分を知り自己理解や他者理解が深まるであろう。
イ　「アサーション」を意識しペアと対話をしながら協力する事で、クイズや課題を解決することができるであろう。

④　授業の概要

自他共に尊重した自己表現ができるようになることを目指す「アサーション」について知る。コミュニケーションにおける３つの自己表現（攻撃タイプ・受け身タイプ・アサーションタイプ）についてパワーポイントのスライドで確認し、自分はどのタイプなのかペアの意見を聞きながら考える場面を設定し発表することで自己理解や他者理解を深める。また、ペアと協力し自己表現タイプクイズや課題の答えを導き出し答えることで「他者と関わる力」「気持ちを伝えあう力」「自分の良いところを見つめる力」の向上を目指した。

⑤　検証と考察

生徒Ｃ・Ｄは相手がアサーションにおけるどのタイプなのかについて、日頃のエピソードを交え伝えあうことができた。お互い「アサーションタイプ」であると伝えられ、照れながらも喜ぶ様子が見られた。また、アサーションにおける自己表現のタイプについてクイズを行い、ペアで対話を重ね答えを出し全問正解することができた（図７）。また、「『友達が意味のわからないことで怒って文句を言ってきた』その時どう答えればよいか」の課題に「ごめんなさい。あなたが何で怒っているかわからないので教えてくれる。そしたら謝ることができるから」という解決策を二人で話し合い導き出すことができた。（図８）このことからも、キャリア教育における「他者と関わる力」「気持ちを伝えあう力」の積み重ねが図られたと考える。

図７　「アサーションクイズ」の様子

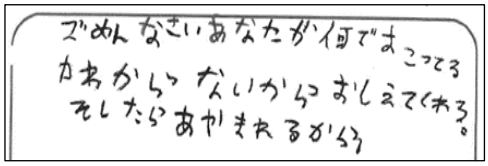


図８　「二人で協力して出した答え」

(3) 検証授業③【令和３年７月８日実施】

①　題材名「共に学び貢献しよう」

②　本時の目標

ア　教科「職業」における「授業で心がけること」と「手順表」を１年生に説明することができる。
イ　ペアと協力し、１年生にワックスがけについて手順表を活用しながら指導することができる。
ウ　１年生と共に協力してワックスがけを行う事ができる。

③　授業仮説

ア　教科「職業」における他学年との共同学習を行う事で、相互に学び合い「自己肯定感」や「自己有用感」を感じることができるであろう。
イ　教室へのワックスがけを通じ、他人のために尽くし貢献することの喜びを感じることができるであろう。

④　授業の概要

これまでの授業において何事においても「チャレンジ」することが大切であるという事やペアとコミュニケーションを取りながら行う共同作業が大切であるという事について指

導を行ってきた。本時には、これまで学んできたワックスがけの知識や技術を活かし、教科「職業」（全体職業）における他学年と共同作業を行う事で、相互に学び合い「自己肯定感」や「自己有用感」を育む授業である。また、ポリッシャーを使用し普段みんなが使用している教室へのワックスがけを行う事で、人のために尽くし貢献する喜びを味わう活動としても設定した。

学習の流れ	学習内容	指導上の留意点
導入	始めの挨拶 出席確認 １年生のグループ分け	※整列・服装の点検を行う。 ※体調の確認を行う。 グループ、氏名を確認する。
展開１ 展開２	生徒による授業説明 ・「心がけること」 ・作業手順 ・安全における注意点 作業開始 ・荷物の搬出 ・清掃 ・洗剤散布 ・ポリッシャーがけ ・洗剤集め ・モップ掛け ・ワックス塗布（１回目） ・ワックス塗布（２回目） ・乾燥 ・荷物の搬入	・１年生がしっかりと聞いているか確認する。 ・説明者が困っていないか観察し補助を行う。 ・作成した資料通りに説明がなされているか確認する。 ・安全な機械操作方法（別表）の説明がなされているか、手袋、バスシューズの着用についての説明がなされているかの確認を行う。 ・手袋・バスシューズの着用確認を行う。 ・２年Ａ・Ｄが１年①グループへ指導。②グループは見学し、その後交代する。 ・２年Ｂ・Ｃが１年③グループへ指導。④グループは見学し、その後交代する。 ・洗剤が目や口につかないよう注意を促す。 ・２年Ｂ・Ｃが１年①及び②グループへ指導しワックス塗布を行う。 ・２年Ａ・Ｄが１年③及び④グループへ指導しワックス塗布を行う。
まとめ	ワークシート記入 終わりのあいさつ	・各自記入をしているか確認を行う。 ・午後の授業の確認を行う。

⑤　検証と考察

前時の授業「共同学習に向けて」において、後輩へどう教えるかペアで話し合い「指導の練習」を行ったこともあり、生徒たちは緊張しながらも自信を持ち後輩の指導している様子が見られた（図９）。特に生徒Ｃにおいては、自分が担当する後輩が聴覚障害を有していることから、ポリッシャー操作についてどう伝えれば理解してくれるだろうかと悩み手話で伝えてはどうかという意見を出し皆と相談していた。当日は実際に手本を見せながら、ゆっくりとした口調で丁寧に説明するなど必死に伝えようとする姿が見られた（図 10）。

図９　自信を持って指導する様子

図 10　丁寧に指導する様子

ワークシートには、今日頑張れたことの欄に「しょうがいをもっている人のこともかんがえてせつめいができた」（図 11）と記入されており、生徒の聴覚障害に対する理解も深まったと考える。共同学習を終えての１年生の感想では、「２年生のおしえかたとても良かったと思いました。つぎは自分たちでやろうとおもいます」「説明がわかりやすかったのでそうじもやりやすかったです」「教え方やサポートの仕方がとても良かったです」といった感想が寄せられた。

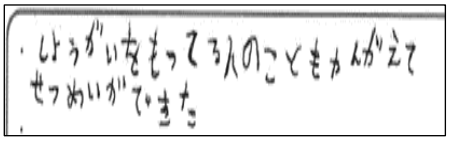


図 11　生徒Ｃのワークシートより

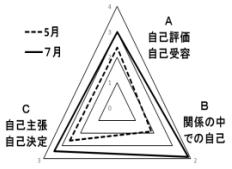
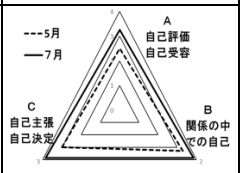
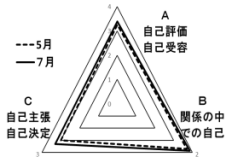
授業後の１年生へのアンケートでは「人の役に立てた」の問いに対して参加した１年生６名中５名が「そう思う」と回答し、２年生は全員が「そう思う」と回答した。

この活動を通し、キャリア教育における「他者と関わる力」「気持ちを伝えあう力」「自己の役割を理解する力」「計画を実行する力」の向上を図るとともに「貢献する喜び」や達成感を得ることで「自己肯定感」や「自己有用感」を認識し始める生徒の姿が見られた。

Ⅳ　仮説の検証

東京都自尊感情測定尺度を用いた生徒の実態把握やキャリア発達を促す教科「職業」における授業内容や指導の工夫を行い、学んだ知識と技術を活かし異年齢による共同学習で貢献活動を行う事で生徒の「自己肯定感」「自己有用感」が育まれるであろう。

1　自尊感情測定尺度から見た生徒の変化

	授業前後の生徒の変化	レーダーチャート
生徒A	当初は「私は今の自分に満足している」の問いに「どちらかといえばあてはまらない」と答えていたが、全ての授業を振り返った後では「どちらかといえばあてはまる」と答え、自己を肯定的に評価するようになり、他者への感謝の気持ちや他者の役に立ちたいと答えるといった変化が見られた。各項目において点数が上がり、前回の測定において平均 2.27 点であったのが 3.43 点に上がった。生徒の中で一番大きな変化がみられた。	
生徒B	「自分はダメな人間だと思うことがある」の問いに「どちらかといえばそう思う」と回答していたが「あてはまらない」と回答。「自分は誰の役にも立っていない」の問いに「どちらかといえばあてはまる」から「あてはまらない」と回答するなどの変化が見られ、自分を肯定的に評価することができるようになった。各項目の評価の平均 2.93 点から 3.66 点へと上がった。	
生徒C	「自分の事が好きである」の問いに「どちらかといえばあてはまらない」と回答していたが「あてはまる」へと変化が見られ、「私は誰にも負けない事（もの）がある」の問いに「あてはまらない」から「どちらかといえばあてはまる」へと変化した。このことから自分を肯定的に捉えるとともに、自分が周りの人の役に立っていることを評価できるようになった。各項目の平均 3.20 点から 3.71 点へと上がった。	
生徒D	「自分の事が好きである」の問いに「どちらかといえばあてはまらない」と答えていたが、授業後は「どちらかといえばあてはまる」と答えており、自分に自信を持ち自らを肯定的に評価することができるようになった。当初より自尊感情が高い傾向にあり各項目の合計点数の平均を見てみると 3.29 点で、各項目において大きな変化はみられなかった。	

2　担任・担当から見た生徒の変化

生徒Ａは初めて行う事など、失敗に対する恐れから積極的に前へ出るタイプではないが、教室へのワックスがけを通じ「相手を気遣いながら作業することができたよ」等、自分から教科「職業」の話をすることが多くなった。また、教室が綺麗になったことで級友や先生から褒められたり感謝され、照れながらも得意気な表情を見せることが多くなった。

生徒Ｂはこれまで登校や授業への行き渋りがみられたが、この授業を通し「今日は授業で〇組のワックスがけをするんだよ。」「〇〇先生に清掃が上手だねって褒められた」等、褒められることの喜びを感じそれを他者へ伝えることができるようになった。また、本人の課題である授業への参加も徐々に「頑張ってみる」と参加することが増えた。

生徒Ｃは以前から優しい性格であり、積極的に発言することは少なかった。しかし、この授業を通し、褒められる事の嬉しさや作業の楽しさを知り周囲を引っ張っていくという意識が芽生えた。学級でも積極的に発言するようになり、本人の課題である「身の回りの物の片付け」も自ら行うようになってきた。

生徒Ｄは元々リーダー性があり、周囲を引っ張っていく力のある生徒だが、周囲への口調が強い面があった。しかし、この授業において自分の行動を周囲から褒められることに喜びを感じ、以前のリーダー性に加え他者を褒める事ができるようになった。また、相手の気持ちを考えない言動をとることもあったが優しい口調で話すことが増えた。

3　考察

東京都自尊感情測定尺度を使用し生徒の実態を把握したことで、新たな課題を見つけ授業に活かすことができた事や、検証授業前後の調査結果を比較したことで生徒の変化を確認できたことは大きな成果である。また、「沖縄県キャリア教育における身に付けさせたい力」を踏まえた授業づくりは卒業後の自立した社会参加へと繋がったと考える。

授業においてはペアと意見を出し合い協力して作業を行うよう繰り返し説明を行ってきた。当初

は機械を使用してのワックスがけに困惑する姿も見られたが、取り組みを重ねるにつれて作業方法・効率の向上を意識した活発な意見が増えた。ペアと対話をしながら協力して課題に取り組む姿が多く見られるようになり、授業時における何気ない一言や行動を注意深く拾い上げ、画像や動画で紹介することにより「承認された」という安心感と成功体験を経験させることができた。また、これまで行ってきた教室へのワックスがけにおいて、他の職員からの感謝の言葉や共同学習における１年生からの感想を伝えることで、「人の役に立てた」「嬉しい」と感じている様子が見られた。普段使用するＨＲ教室へのワックスがけを行う事で教師や生徒から「綺麗になったね。ありがとう」という声をかけられ喜ぶ姿がみられ「自己肯定感」や「自己有用感」を育むことができたと実感している。

オリエンテーション時のアンケートにおいて「授業は楽しいですか」の問いに生徒Ａは「意味が分からないから楽しくない」、生徒Ｂは「人と喧嘩するから楽しくない」と答えていた。しかし、見通しを持った授業の進行やペアから見た自分の良いところを聞き、自分の良いところを見つけたこと、ペアとの共同作業においてお互いの意見を認め合う事で自分に自信がつき、適切なコミュニケーションを意識したことで、「人の役に立ちたい、またこのような授業を行いたい」といった感想を伝えるようになった。生徒Ｃが学級において積極的に発言するようになったことや、生徒Ｄが優しい口調で話すようになったことは、ペア学習や「アサーション」について学んだことがきっかけになったのではないかと考える。このような生徒の変化を授業の様子やワークシートから確認することができた。

以上の事から、自尊感情測定尺度により生徒の実態や課題を把握し、キャリア教育の視点に立った授業内容や指導の工夫、他者の役に立つ事で自分を肯定的に評価する取り組みは、生徒の「自己肯定感」「自己有用感」を育むことに有効であったと考える。

しかし、「自己肯定感」「自己有用感」を更に向上させ、定着させるためには、学校における様々な活動場面において本人が「自己の良さ」に気付き自己の価値を認め、他者との関わりの中において「自分の役割」や「貢献している実感」を得る体験を積むことが重要である。
また、学校のみならず家庭や地域において行う異年齢間との活動を通し、望ましい経験をすることで「自己肯定感」や「自己有用感」の更なる向上と定着を図ることができるのだと考える。

Ⅴ　成果と今後の課題

１　成果

(1) 「自尊感情測定尺度」の結果や共同学習による貢献活動を通して「自己肯定感」「自己有用感」の高まりを「ワークシート」を用い確認することができた。

(2) 適切なコミュニケーション「アサーション」について学んだことを活かし、異年齢による共同学習を通して貢献活動を実施することができた。

(3) ペア学習を通し生徒が「共同作業」、「対話による解決」、「チャレンジすることの大切さ」を意識し、活発に意見を出し合い学習に取り組むようになった。

(4) 授業や指導の工夫としてペア学習やタブレット端末を使用したこと、「授業で心がけること」や「手順表」を提示することで、生徒が見通しを持ち授業に取り組むことができた。

(5) 他職員と教科間連絡会において授業の様子や情報を共有し連携したことで、生徒へ「貢献している喜び」を実感させることができた。

２　課題

(1) 「自己の良さ」に気付き自己の価値を認め、他者との関わりの中で「貢献している実感」を得る授業等をするために教科間連絡会において他教科と情報を交換・共有し連携を図る。

(2) 「自己肯定感」や「自己有用感」の向上を目指し、家庭や地域に対して学校行事や取り組みについての情報を発信する。

＜参考文献＞

平木典子　2020　『よくわかる　アサーション自分の気持ちの伝え方』　主婦の友社
沖縄県教育委員会　2020　沖縄県キャリア教育の基本方針
文部科学省　2019　特別支援学校高等部学習指導要領
新谷優　2017　『自尊心からの開放』　誠信書房
菅沼憲治　2017　『セルフアサーショントレーニング』　東京図書
上岡一世　2015　『キャリア教育を取り入れた特別支援教育の授業づくり　実践編』明治図書出版
上岡一世　2013　『キャリア教育を取り入れた特別支援教育の授業づくり』明治図書出版
山崎英則・片上宗二　『教育用語辞典』ミネルヴァ書房
北島貞一　1999　『自己有用感－生きる力の中核－』　田研出版

＜参考ｗｅｂサイト＞

内閣府　2021　障害者白書
https://www8.cao.go.jp/shougai/whitepaper/index-w.html（最終閲覧 2021 年６月）
沖縄県教育委員会　2020　沖縄県キャリア教育の基本方針
https://www.pref.okinawa.jp/edu/kenritsu/jujitsu/shisaku/career/index.html（最終閲覧 2021 年６月）
沖縄県教育委員会　2020　沖縄県学力向上推５か年プラン・プロジェクトⅡ
https://www.pref.okinawa.jp/edu/gimu/jujitsu/data/documents/project2.pdf（最終閲覧 2021 年６月）
内閣府　2018　我が国と諸外国の若者の意識に関する調査
https://www8.cao.go.jp/youth/kenkyu/ishiki/h30/pdf-index.html（最終閲覧 2021 年６月）
文部科学省国立教育政策研究所　2015　生徒指導リーフ「自尊感情」？それとも「自己有用感」？
https://www.nier.go.jp/shido/leaf/leaf18.pdf（最終閲覧 2021 年６月）